

2023年1月1日 午前礼拝
「宣教の始まり」 説教者：堺希望伝道師

【引用聖句】

マタイ 4:12~4:17

12. ヨハネが捕えられたと聞いてイエスは、ガリラヤへ立ちのかれた。
13. そしてナザレを去って、カペナウムに来て住まわれた。ゼブルンとナフタリとの境にある、湖のほとりの町である。
14. これは、預言者イザヤを通して言われた事が、成就するためであった。すなわち、
15. 「ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。
16. 暗やみの中に座っていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。」
17. この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

【説教要約】

① **イエス様が通られる道**

マタイ 4:12

ヨハネが捕らえられたと聞いてイエスは、ガリラヤへ立ちのかれた。

今日は、イエス様の宣教の始まりを見ていきます。バプテスマのヨハネが捕まったことを聞いて、ガリラヤ地方に移り住まれます。このバプテスマのヨハネは、神様がイエス様の前に遣わされた預言者でした。

マタイ 3:1~3

1. そのころ、バプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教えを宣べて、言った。
2. 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」
3. この人は預言者イザヤによって、「荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ』」

イエス様の道を備え、イエス様の通られる道をまっすぐにすることが使命でした。イエス様の通られる道とは、見える道ではありません。それは人の心に道を作ることなのです。

罪を指摘し、神様の方へ向きを変えるように宣教したのです。聞いた人々は、自分の罪を告白し、バプテスマを受けていました。

それはヨハネが救いを与えるのではなく、この後にイエス様が来られるから、イエス様を受け入れる心の人々に備えていたのです。

私たちは、宣教するようにイエス様から言われています。キリスト教国であるアメリカなどでは、キリスト教やイエス様のことを多少は話題にしやすいかもしれませんが。

しかし日本ではマイナーといわざるを得ません。イエス様が何をした人物なのかすら、知っている人はそこまで多くないように思います。このような中でイエス様のことを話題にするのは勇気がいります。神についての話題ですし、場合によっては相手の罪を指摘することもあるかもしれません。

覚えていたいの、人を救うのは決して私たちではないということです。私たちがすることはあくまで、バプテスマのヨハネと同じ道備えなのです。ヨハネは多くの人に尊敬されました。

「もしかするとこの人が約束の救い主かもしれない」と思われていたほどでした。しかしヨハネはあくまで「私の後に来られる方は私よりも力のある方です」とイエス様を指し続けました。

そのヨハネが語り、人々が聞いて作られた道を、神様は用いてくださいました。その道をこれからイエス様は通って人の心へやって来られるのです。このように、私たちの語ることが用いられたなら、なんと幸いなことでしょうか。

そのヨハネが今日の箇所では捕まります。それは神様の時でした。道備えの時期が終わったのです。

②ガリラヤから

マタイ 4 : 13~16

13. そしてナザレを去って、カペナウムに来て住まわれた。ゼブルンとナフタリとの境にある、湖のほとりの町である。
14. これは、預言者イザヤを通して言われた事が、成就するためであった。すなわち、
15. 「ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。
16. 暗やみの中に座っていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。」

先回まで、イエス様は悪魔からの試練に遭われ、それを撃退する様を見てきました。それはイエス様こそ、アダムとエバに始まり私たちも勝つことのできなかつた罪と悪魔に、完全に勝利された約束の救い主だからです。私たちは日頃、信仰の戦いの中におり、悪魔や罪の誘惑と戦っています。それも神様の手中でのことですが。

しかしイエス様は、宣教を始められる前から既に、悪魔との戦いに勝利されたのです。普通、戦いのある物語では、最後に一大決戦があり正義が勝つか悪が勝つか期待を躍らせるものです。ところが、ことイエス様においては、すでに働きの前から勝利があったのです。それはイエス様が、唯一の神様だからです。

神様にはぎりぎりの戦いや、神様に並ぶような敵や存在はいません。神様は遥か高い所におられ、何者もこの方に太刀打ちできないのです。私たちよりも圧倒的に強い悪魔も、4章の初めで敗北しました。このイエス様に頼れば、恐れるものは何もありません。

いよいよ、そのイエス様が活動を開始されるのです。その始めはカペナウムという北のガリラヤ地方の町でした。ところがこのガリラヤという地域は、歴史的にも靈的にも、とても良い場所とは言えなかったのです。

イエス様がなぜガリラヤから宣教を始められたのか知るために、ガリラヤについて少し触れる必要があります。ガリラヤはイスラエルが一番北にある地域です。外側にあるので、昔から他国と接触する機会が多い場所でした。

一番大きな出来事として、列王記や歴代誌に書かれている北イスラエルの滅亡があります。前722年に、アッシリア帝国という当時最も大きな帝国から攻撃を受け、滅ぼされてしまったのです。

アッシリアという国は、占領した国からクーデターが起こらないように、他の国の人々を移住させてその国の文化や信仰を薄いものにする、という対策を取っていました。

北にあるガリラヤ、またサマリヤといった地域は占領された後、外国の人々が移住して文化も信仰も混ざってしまった歴史があります。

一方、首都エルサレムがある南のユダは、信仰や血筋を混ぜない戦いをしてきたので、プライドがありました。

どちらも元は神様が造られたイスラエルと言う国だったのですが、この当時はユダがガリラヤやサマリヤを別の国、別の信仰、別の民族として見下していました。

有名な、サマリヤの女にイエス様が水を求める話の中で、こう書かれています。

ヨハネ4:9

そこで、そのサマリヤの女は言った。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」——ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである——

このように、北の地域は「正しい信仰を失った汚らわしい民族」として蔑まれていました。

しかし、神であられるイエス様は、伝統とみことばを守ることに誰よりも努力していると自負していた首都エルサレムやその地域から活動を始めることをなさいませんでした。逆に、「不信仰で汚れている」と思われていたガリラヤ地方からみことばを宣べ始めるのです。

ここにこそ、神様のみこころがありました。

マタイ 4 : 14~16

14. これは、預言者イザヤを通して言われた事が、成就するためであった。すなわち、
15. 「ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。
16. 暗やみの中に座っていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。」

これは、イザヤ書の9章からの引用です。
引用元を少し前から読んでみます。

イザヤ 8 : 21~22

- 21 彼は、迫害され、飢えて、国を歩き回り、飢えて、怒りに身をゆだねる。上を仰いでは自分の王と神をのろう。
22 地を見ると、見よ、苦難とやみ、苦悩の暗やみ、暗黒、追放された者。

イザヤ 9 : 1~2

- 1 しかし、苦しみのあった所に、やみがなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは光栄を受けた。
2 やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。

この、「彼」はガリラヤに住む人の代表です。彼らは、国を滅ぼされ、持っていた信仰と伝統を失いました。その結果、痛みを負いながら怒りに満ち、王と神を呪う程でした。まさに、何も見えない闇の中にいました。また、信仰を持ち続けられたユダの人々からは、その姿を見下されていました。痛みと、闇。自分では抜け出すこともできません。

しかし、その彼らに大きな光が臨むと約束されていたのです。少し先を読むと、それがどのような人物なのか分かるようになっています。

イザヤ 9 : 6~7

6. ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。
7. その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。

それは神の子、イエス様です。イエス様は、闇の中にいる者たち、「不信仰」な人たちに最初に臨んでくださったのです。これは、神の愛が、恵みだからですね。ガリラヤの人々は、確かに見下される様な生き方でした。信仰を失い、自分がどこにいるのか分からない闇の中にいました。神があわれみを施す理由なんて、ないじゃありませんか。

しかし、受ける資格のない者を、これほど愛してくださるのが神様なのです。イエス様が最初に通られた心の道はガリラヤでした。ガリラヤに、バプテスマのヨハネのメッセージを聞いて悔い改めた人が多くいたということもあるでしょう。彼らは、自分のみじめさや不信仰のひどさを自分で知っていたのです。

一方、エルサレムをはじめ「自分達こそ神を知っている」と自負していたユダヤの人々はそうではありませんでした。彼らは、神の愛が恵みであると分からなかったのです。自分たちは神に愛され、恵まれて当然だと思い上がってしまったのです。

本当の信仰は、自分の罪深さを知ってへりくだったところにあります。そこに神の溢れんほどの恵みが注がれるのです。教えられます。

③宣教とは

マタイ 4 : 17

この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

ガリラヤで、イエス様は何を語られたのか。それは「悔い改めなさい」ということです。ことばこそバプテスマのヨハネと同じですが、意味が違います。

ヨハネの「悔い改め」には「自分の罪を告白して、水のバプテスマを受ける」だけでなく、「悔い改めにふさわしい実を結ばなければ、さばかれる」というものでした。ところが、イエス様が命じる悔い改めは、ただただ「神に立ち帰る」だけなのです。何度でも。

なぜなら、それは人間が自分の力や努力によって「悔い改めにふさわしい実を結ぶ」ことなどできないからです。

パウロは、自分自身の心についてこう言います。

ローマ 7 : 18~20

18. 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

19. 私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。

20. もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。

人間はみな罪人である。聖書の教える事ですが、それを非常に生々しく描いています。人には、神に喜ばれることをする力が全くないのです。もし「私は神を喜ばせている」と思う人がいたら、それは大きな勘違いなのです。

実際、イエス様が最初に訪れることをしなかったエルサレムがまさにその状態でした。彼らは、「自分たちは立派なことをして神を喜ばせている」と思っていました。イエス様はそれを喜ばれなかったのです。

「悔い改めにふさわしい実を結ぶ」。それはただ御霊によって可能なのです。神が働いてくださり、用いてくださらなければ、それは成し得ません。

だから、何よりもまず初めに悔い改めが必要なのです。どんな人にも悔い改めが必要なのです。人がイエス様に心を向けること。これこそが神様の喜ばれることです。

イエス様に立ち帰ったら、イエス様がその人を変えて用いてくださいます。